

「私が出会った小さなキリスト」

◎人は皆偉くなりたい 大きいということ、小さいということ(Mk.9:33-35)

イエスが弟子たちに尋ねました。「途中で何を議論していたのか」。この箇所から少し遡りますと、「再び自分の死と復活を予告する」という小見出しのつけられた箇所があります(マルコ 9:30-32)。「人の子は、人々の手に引き渡され、殺される。殺されて三日の後に復活する」。弟子たちはこの言葉が分からなかったが、怖くて尋ねられなかった。と書かれています。そこから家に帰る道中の弟子たち。本来なら、イエスに選ばれた聖なる弟子たちならば、強いて言うなら、イエスの死と復活について話し合っていて欲しいところです。「何を議論していたのか」と問われて、誰もすぐには答えられませんでした。イエスがこれから死に向かっていよいよ歩み出すという時に、その予告を聞いたすぐその後に、弟子たちは、誰が一番偉いかと話し合っていた。弟子たちは皆、偉くなりたいかったのです。自分こそが一番偉い人になりたいと願っていたのです。イエスが受難に向かうというその時に、です。弟子たちは、イエスの苦しみを理解できず、それどころか自分が偉いかどうかを気にしていたのです。

12人だけ選ばれた弟子、使徒とも呼ばれるメンバーです。12人もの人間が集まっていたら、やはり牽制しあったり、競争が生まれたりするものだと思います。私たちの生きるこの社会にあっても「誰が一番偉いか」という問い、あるいは「偉くなりたい」という願いは、なかなか遠ざけることができません。学校では成績で順番がつけられます。人間関係においても、上下関係がつくられることもあります。仕事をしても、偉い立場の人と、その人に従って働く人たちがいます。教会ではどうでしょうか。一見、牧師が一番偉くて、その次に役員の人たちがいて、それから役員以外の信徒、という風に見えがちかもしれませんが、決してそうではないよとパウロが言っています。パウロの話はもう少し後でします。

人は皆、偉くなりたいという思いを持っています。私たちもそうです。上があって下があると、やはり上を目指したくなるものです。聖書に出てくる「偉い」という言葉の原語は「大きい」という意味を持つ言葉です。存在が大きい、大切にされているということです。偉くなりたいということは、大きい存在になりたいということです。まわりの人から認められたい、すごいと思われたい、尊重されたい、悪口を言われたくない。人間は皆そういう思いを持っていると思います。反対に、「小さい」という言葉は「偉くない」という意味も含みます。存在として小さいということ。価値がない、弱い、大切にされていないという意味です。ここでのイエス・キリストの教えは逆転の教えです。「いちばん先になりたいものは、全ての人の後になり、全ての人に仕える者になりなさい」(9:35)偉くなりたいなら、仕えるものになりなさい。大きくなりたければ、小さくなりなさいと言うのです。

◎子どもを抱き上げるキリスト 「小さい」存在である子ども(Mk.9:36-37)

そして「小さい存在」の1人の例として、イエスは子どもを連れてきました。「小さい」というのはサイズが小さいということではありません。存在が小さい、大したことない、という意味です。子供の手を取って、真ん中に立たせ、抱き上げて言われた。「わたしの名のためにこのような子供の一人を受け入れる者は、私を受け入れるのである」。(9:36-37)

手を取る、立たせる、抱き上げる、全てこれらの動きの主語はイエスです。子どもは何もしていません。されるがまま、身を任せただけ。これが、まさにイエスを受け入れたということなのです。そしてイエスを遣わされた神を受け入れたということなのです。自分では何もしない、拒否もしない。神を受け入れるとは、自分自身の主導権をイエスに渡すということではないでしょうか。自分の力でなんとかしよう、どうにかしようともがくのではなく、イエスに抱き上げられた子どものように、されるがまま、全てを委ねるのです。

今でこそ、子どもは宝と言いますし、可愛いとか尊いと言う方は多いですが、当時のユダヤの社会ではそうではありませんでした。子どもは労働力にならない、役に立たない存在で、価値がないものとされていました。ユダヤの律法も守らないし、大人の言うこと聞きません。特に小さな赤ちゃんは、自分では全く何もできない。泣いて求めることしかできません。そんな「価値のない」存在、「小さな人」である子どもを、イエスは抱き上げました。自分では何もできないとても弱い存在でありながら、抵抗する力さえない、だからこそイエスに与えられたものを受け入れることしかできない、いや、全て受け入れることができる、実はとても強い存在でもあるのです。弱く、小さな存在である子どもこそ、実は一番大きいのです。これこそキリストの逆転の教えです。

「抱き上げる」ということは、イエスの目線の高さまで連れてくるということです。この子はイエスが見ているのと同じ景色を見たわけです。普段は子どもの目線でしか世界を見ることのできない子どもが、イエスの眺めている世界を見た。これはとても象徴的な出来事です。人間は神の視点に立つことはできません。しかし、ただイエスさまに抱き上げられることによってのみ、その時だけ、イエス・キリストと同じ世界を見ることができるのです。キリスト教では神様と離れていることを罪と呼び、神様とくっついていることを救いと呼びます。イエス・キリストを通してしか、救いはありえないということです。

◎キリストの体としての教会(1Cor.12:14-26)

パウロは教会を一つの体に例えています。この手紙が書かれた当時、コリントの教会の中では論争が起きていました。コリントの教会には、特に声が大い、特別優秀そうな信徒が何人かいました。そして後からその教会に来た一見優れていないと思われるような信徒が、なんとなくその場にいつらような環境でした。優秀な信徒と、そうでもない信徒。けっこう生々しい話ですね。やはりオルガンが上手に弾けたり、会計の管理が得意だったり、役員会や委員会で皆の意見をまとめるのが得意な人があるなかで、ふと自分には一体どんな賜物があるんだろうかと疑問に思うことがあります。自分には何もないんじゃないかと。あの人は大い、自分は小さいとか、あの人もわりと小さい、あの人に比べたら私はまだちょっと大きい方だな、なんて考えてしまうのが人間です。私なんか、皆さんから見たら、もしかしたら立派に「牧師」しているように見えるかもしれませんが、毎週井上先生の力強い、エネルギッシュな説教を聞いていると、ああ私はあんなふうにはできない、私には何もないと思うわけです。この、人と自分を比べる物差しで世界を見ている時、井上先生は優れた信徒、自分はそうでもない信徒だと思うわけです。でもそういうのは、私たち人間の価値観です。偉くなりたい、大きくなりたいという思いがあるからです。

賜物というのは、英語では「ギフト」と翻訳される言葉です。神様からの贈り物なのです。賜物って、わかりやすい賜物もあれば、一見わかりにくい賜物もありますよね。それでも全ての人が、神様からのギフト、賜物をいただいています。そしてパウロは、一見どんな賜物があるんだろうかと思うような人も合わせて、やっと一つの教会が成り立つと言います。あなたは体の一部分。目も耳も、手も足も、指一本でも欠けては、キリストの体としての教会では無くなってしまふ、全ての人が重要な人なのだ、キリストの体を形作る一部分なのだと教えています。牧師が偉いなんてことはありません。ただ目立つ部分というだけです。役員が偉くて役員以外の人の方が偉くないなんてこともありません。全ての人が同じように、欠けてはいけない尊い存在なのだとパウロは教えています。

私事ですが、2週間ほど前に歯を抜きました。虫歯がひどくなってしまふ、歯を抜いてインプラントにすることになりました。歯を抜いたら、その後とても痛くなりました。抜いたところだけが痛いのではなく、歯茎や顎も痛いし、口を大きく開けることもできないし、痛くて食べ物も噛めません。歯が痛すぎて頭も痛くなります。食欲もないし、食べないと、頭が回らなくなるし、だるくなってきます。夜も痛くて眠れません。睡眠不足になると、いよいよ体全身の調子が悪くなって、昼間も倦怠感が続き、生活に支障をきたします。歯だけが痛いわけではないのです。たかだか歯一本のこと、小さいことが、これだけ体に大きな影響を及ぼすのです。

私の周りの世代でよく聞く話ですが、例えば仕事が辛くて辞めたいと迷っている人がいたとします。でも辞めたら他の人に迷惑をかけるとか、ここで辞めるのは無責任なんじゃないとか、悩むわけです。そういう時にかけられる言葉としてよく聞くのが「あなたひとりが辞めたとして、次の日から会社は変わらずなんとかやっていくよ」というものです。「代わりはいくらでもいる」ということです。あるいは「誰かひとりが死んだところで次の日から世界は変わらず回っていくよ」と。確かにそうかもしれません。でも、キリストの体はそうではないのです。教会はそうではないのです。(ここでの教会というのは、どこどこ教会ということではなく、世界全体のキリストによって集まる広い意味での教会です。)イエスさまは痛いと言っているのです。歯一本でも失ったら、痛いんです。歯を抜いた所だけが痛いではありません、頭も痛いし、食事もしない、痛くて眠れない、全身がだるい、あなた1人を失うことはそれほどまでに苦しいのだと、イエスさまは言っているのです。それだけ一人ひとりのことをイエスさまが必要としている、大切な一部分なのだというわけです。

◎小さなキリスト

以前私が通っていた教会で、こんな出会いがありました。仕事がうまくいかなくなって辞めた時に、教会員の知人ということでその教会に来始めた方がいました。仕事を辞めた頃から、うつ状態だったのかと思

います、食生活もいい加減で、お風呂に入るのもトイレに行くのも面倒で、なかなかできないという様子でした。お風呂に入らないからやはり匂いもあります。服も汚れています。そういう人って、正直できればあまり近づきたくない、触れたくないと思います。

でも、こういう当たり前のように遠ざけられる人こそが、実はキリストを映しているんだ、と私は思うのです。誰もが大きい存在になりたいと望むなか、その人は偉くなること、大きくなることを放棄したのです。誰よりも小さく小さくなっていったのです。そしてマタイによる福音書にあるこんな言葉を思い出しました。「これらの小さなものにしてくれたことは、私にしてくれたことなのである」。イエスの言葉です。当時のユダヤの社会においては小さな子どもを受け入れること、そして私にとっては、全身汚れたその方を受け入れることこそが、まさに、キリストを受け入れる、神を受け入れるということなんじゃないかと思ったのです。

ある時からその方は平日も教会の前に立って、道ゆく人に教会おいでよ、バザーおいでよ、クリスマスおいでよと誰彼かまわず声をかけ始めたのです。それを見た私ははじめ、そんなことしたら「変な人に声かけられた、近寄らないようにしよう」「教会って怖いな」って思われてしまうかもしれない、と考えました。宗教は怖いものだと思っている人も日本には多くいますから、私自身は、あまり自分からはそこまでガツガツいけないんです。しかし、「教会においでよ」と声をかけることは初歩中の初歩、伝道の第一歩でもあります。そんな姿を見て、ある時「あ、イエスさまがここにいるんだな」と思ったのです。この方こそ、私が出会った小さなキリストでした。イエスさまは実はものすごく近くにいたんだ、ということに気づかせてくれた出会いでした。

月並みですが、親切にしようと思いました。親切にはできても、心から愛することはなかなか難しいのだと思い知らされた出来事でした。そして、私はクリスチャンで、しかも牧師でありながら、隣人を愛することすらできないのだと、自分の愚かさを知った出来事でもありました。私はこの人を愛さなきゃいけない、どうしようどうしようともがいているうちは、私の心のどこかに、偉くなりたいという気持ちがあったのだと思います。この方を愛せる私は立派だ！なんて思っていたのです。ふと思い出したのです。この人も私も神様に愛された尊い人間なのだ、と。私には愛せないかもしれない、でも神様がすでに愛している。そう思った時、心が楽になったのです。

◎自分の小ささを知る時

コリントの教会の中では論争や喧嘩が起きていました。教会とパウロとの間でも論争が起きていました。いつの時代も、どこの教会でも、やはり意見のすれ違いというのは絶えません。人間同士だからです。好きになれない人がいる、仲良くできない人がいる、近寄りづらい人がいる。人間同士のことだから、当たり前のことなのです。それでもただ、「自分の苦手なこの人も神様にとっては尊い1人の人間なんだ、この人も神様の愛を受けているんだ」ということだけは忘れてはいけません。これがパウロのメッセージです。そしてそれは私たちにも語られているキリストの教えです。

全ての人を愛するなんてことは、私たち人間にはできません。私たちは神様じゃないからです。一方で人から嫌われたくない、偉くなりたい、大きくなりたいと願ってしまいます。神様じゃないのに、です。私たちは、全ての人が必要なんだと求めるイエスの求めに、神様の大きな愛に、触れたとき、人を愛することのできない自分の存在の小ささを自覚するのではないのでしょうか。自分が実は無力だ、弱い存在なのだと気付いた時、その心にこそ、されるがままイエスに抱き上げられた子どものように、全てを委ねる信仰が与えられるのではないのでしょうか。そして、自分の力では何もできない、自分は人を愛することすらできない弱い無力な存在だと知った時、自分が小さい存在なのだと知った時、あの時、弟子たちの前でイエスさまに抱き上げられた子どもは実は自分自身だったのだと気づくのです。唯一の大きい人、イエス・キリストの見る景色を共に見るものとされるのです。本当に小さくなれた時、私たちは、キリストによって神と一つにされるのです。それで初めて、大きくなるのです。価値あるものとされるのです。人と人との間で、あの人は大きい、自分は小さいと見比べるのではなく、ただ神様の前に立ち、計り知ることのできない大きな愛をくださる神さまの前で、自分の小ささを見つめる者でありたいと思います。